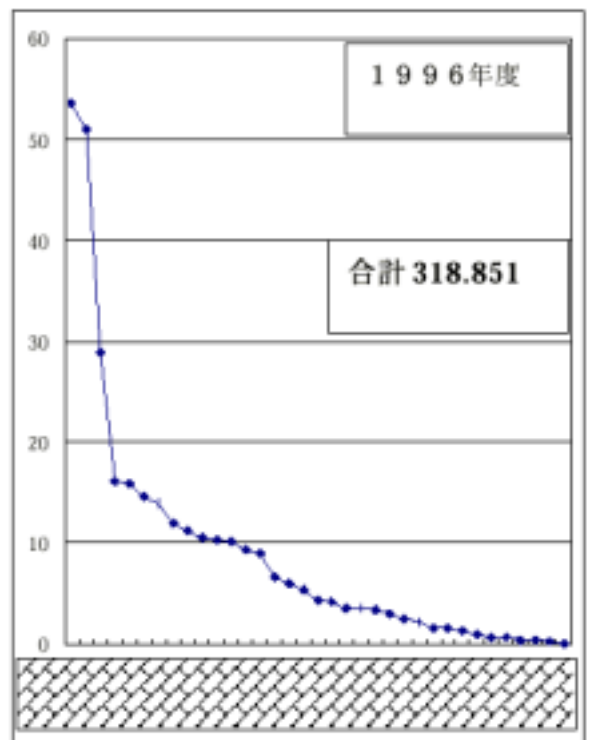
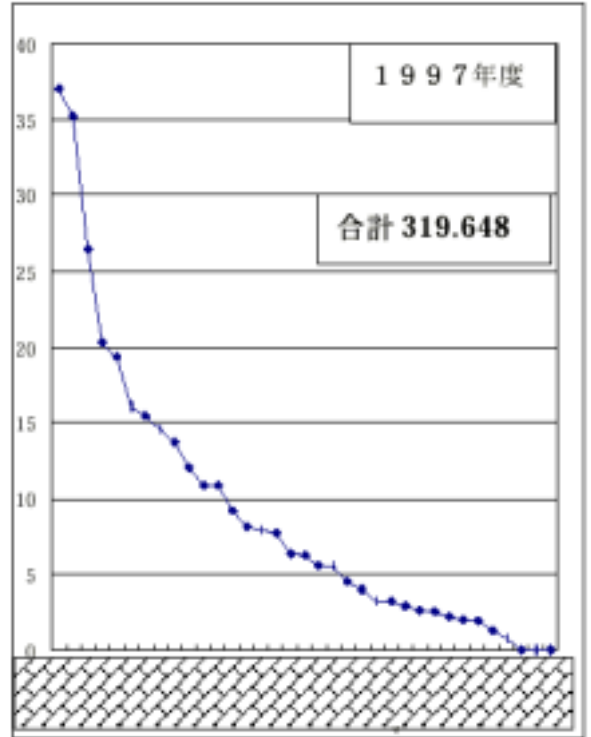


大分医科大学 講座別 Impact Factor ランキングのことなど

実験実習機器センター助教授 吉田 敏

1996, 1997 年度の研究業績目録に基づく医学部基礎および臨床系講座(35 講座・部局;ただし、看護学科、一般教育、附属共同利用施設は除く)ごとの Publication リストから、ISI 1996 年版の Impact Factor データベースより各 Journal の Impact Factor(IF)を抜き出して合計をした。その結果を右に、講座ごとに IF の大きいところから小さいほうへ並べてグラフ化して示している。目録に公表されている Journal のうち、ISI の約 4500 誌のデータベースにないものの IF は 0 として計算している。したがって IF が 0 であっても発表論文が無いわけではない。講座名の発表はここではしないが、上位 5 位までの講座の IF 合計は、1996 年度で全体の 52%、1997 年度で 43% を占めていて、全体の合計 320 以下という低さは、それ以外の講座の IF の低さによってひきずられているものである。特に、トップ 10 のなかに基礎系講座が 3~4 しか入っていない。他の同じ規模の医科大学では 1997 年度で 600 近い IF 合計を出しているところがあるが、この 300 近い差は大きく、研究能力の低さと評価されかねない現状である。最近の研究機器の充当予算の低調さや、大学院先端などの大きなプロジェクトが来ない理由にもなっているかもしれない。大学のもつ基礎情報の大きさ(研究・教育能力の高さ)を如何に上げるかを改革の基本に据えるべきではないか。



March 2000

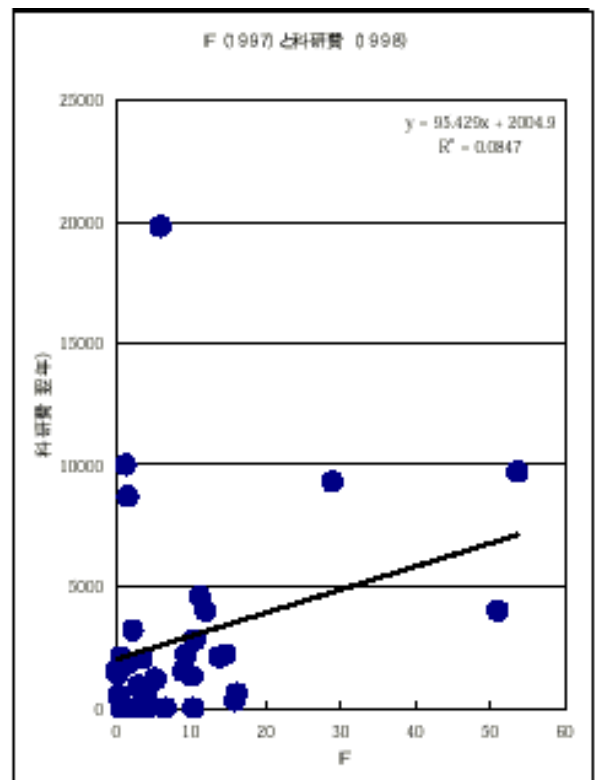
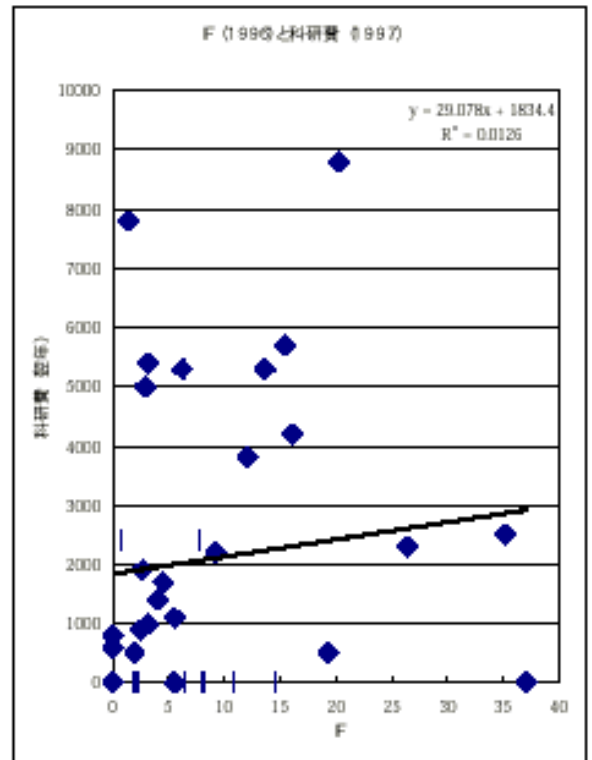
RLC No.31 NEWS

- 科研費との関係について -

ここまで調べたついでに、別の調査もしてみた。それは、研究論文に関する上に述べた ImpactFactor の大きさと、科学研究費の当り具合、には関係があるのだろうか、という日ごろから抱いている疑問を検証するためである。「科研費は良い論文を書いた事後評価（ご褒美？）としてもらえる」とか、「高い質の論文を書かないと科研費はあたらない」とか、「審査委員とのコネが強い（同じ研究グループになっている、とか）と取りやすい」とか、いう「うわさ」はもう何年も前から耳にしている。立証はされていないが…。確かに、大学ごとに比較すると、論文数や Nature などへの掲載数と、大学毎にもらう科研費予算額は、やはり東大、京大、阪大など旧7帝大が多く、やはり相関があるのだろう、と思ってしまう。また、大分医大は、もらう科研費の総額は一億円程度で、レベルも下から数番目という低さだそうである。これは IF が低いことと、やはり関係があるせいだろう、と思ってしまう。

ところが、である。

こういう比較が適当なのかどうか、統計のご専門の方にもご意見頂きたいのであるが、医大の中でミクロに見ると、IF と科研費額との関係を示す右の二つのグラフで見るように、講座毎の IF と講座のもらっている科研費の額とは、ほとんど相関は見られないのである（相関係数 R^2 は 0.1 以下）。この場合は、1996 年度の IF と 1997 年度の科研費総額、および 1997 年度の IF と 1998 年度の科研費を比較し二つの図にしたものである。これは、「科研費は論文業績



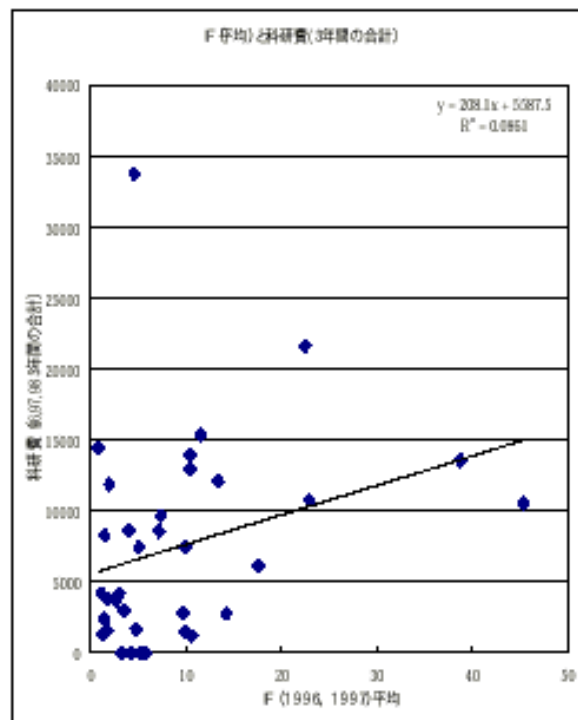
に対して与えられる」という「定説のひとつ」にそった比較である。しかし、科研費は、3年度渡りなどということもあるので、今度は IF の2年分の平均

March 2000

RLC
NEWS
No.31

と、1996～1998年の3年間の科研費の総額とも比較した。これが右の図である。

ここでも同じく、やはりIFと科研費額との間にはりっぱに相関はあるとはとても言えない。ただ、「だから科研費と言うのは...」という評価分析はここでは差し控えよう。もっと大規模な調査をしないと、これは単に大分医大というミクロの環境で見た「ゆらぎ」に過ぎないのか、もっとマクロに大学同士および5年以上のタイムスパンで比較すればやはりIFと科研費総額との相関はでてくるものか、は結論は出せないのかもしれないが、少なくともミクロで見る限り、この結果は実感と合っている。IFが2とか4ぐらいの論文を着実に出していて年間一人でIFが10を越える業績があっても科研費は当たらないことが多いし、一方では論文は見るべきものはたいして出していないのに科研費は当たっている、などということを身の回りでしょっちゅう聞くからである。今後、大学が外部の組織から厳しい評価がなされていく時代であるので、どのような基準で評価されていくのかには無関心ではられない。大学の死活問題であるからである。しかし、このIFと科研費の関係をミクロで見る



限り、「研究業績の質の高さ」が必ずしも「科研費の額」に反映しているわけではないので、科研費の審査自体をその上の組織から厳しく評価していただかないと、私には納得がいかない。以上、誰か他にもっと全国レベル（アメリカとの比較も）での調査をしてほしいと思い、ちょっと小石を投げて波紋を広げようというほんのささいな気持ちで調べたが、これは行政領域の「専門家」に本格的にやって頂いて開示して頂いたほうが良いと思う。

(RLC, S. Yoshida)